

書評 水村美苗『日本語が亡びるとき』

水村美苗さんの近著『日本語が亡びるとき』は、日本語について、言葉そのものについて少しでも考えたことのある人なら、ずっしりとお腹にこたえる本だ。

私の<愛する>日本語はこのままでは亡びてしまう。
今ならまだ間に合うかもしれない、どうにかして日本語を救い出さなくては…。

最終章「英語教育と日本語教育」からは、水村さんの切迫した危機感が悲鳴のように伝わってくる。

もちろん水村さんの言う「亡び」とは、いま私たちの使っている日本語がこの地上からあとかたもなく消えてしまうことではない。

水村さんは小説家だから、この日本語の「亡び」について文学的に表現している。

私が言う『亡びる』とは、言語学者とは別の意味である。それは、ひとつの<書き言葉>が、あるとき空を駆けるような高みに達し、高らかに世界をも自分をも謳いあげ、やがてはそのときの記憶さえ失ってしまうほど低いものに成り果ててしまうことにほかならない。(P.52)

つまり、日本語が人々の日常生活の用には間に合っても、「美的、知的、倫理的な重荷」には耐えられない言葉、水村さんのキーワードを使うなら「叡智を求める人々」が素通りしてしまう言葉になり下がる、ということである。

そうなってもいいのか、どうすればこの運命から日本語を救い出せるか、と水村さんは問いかけているのである。

日本語に対して定見を持ち合わせているわけではない私は、この問いを前に途方に暮れてしまう。

ただ、水村さんの問題提起に啓発され、触発され、刺激されることは多い。
それを本書と対話しつつ考えてみたい。

水村さんの議論の出発点は、英語が世界全体を覆う「普遍語」になったという事実認識である。

「普遍語」というのも本書のキーワードのひとつである。

水村さんの解説によれば、かつてのヨーロッパにおけるラテン語、イスラム圏におけるアラビア語、そして東アジアにおける漢文がそれに当たる。

つまり、日常生活のもうひとつ上の次元、宗教や学術文化、高等教育の世界で流通する広域的な共通語のことである。

読書人と呼ばれるほどの人々、社会を動かすことのできるエリートは住んでいる国や地域にかかわらずみなこの普遍語で読み書きすることができた。

これに対して、人々の日常生活のレベルで流通する多種多様な地域限定の言語は「現地語」と対置されている。

そして、もうひとつ「国語」というカテゴリーが示される。

水村さんによれば、「国語」は近代国民国家の勃興を背景として「普遍語」を「現地語」に翻訳する過程で成立した産物である。

国民国家への歴史のうねりが「国語」の成立を促し、その国語が「国民」としての人々の自覚を強化しナショナリズムを高揚させるという関係にある。

この三種の言葉はそれぞれの言語圏の中で並列ではなく、三層構造をなしている。

社会の基底には「土語」といってもいい「現地語」が蟠踞している。一方、上空には「普遍語」が風のように吹きわたっている。そしてこの両者にはさまれ、仲立ちする形で「国語」が位置している。

当然そこでは言葉の分業が生まれ、「<普遍語>は上位のレベルにあり、美的にだけでなく、知的にも、倫理的にも、最高のものを目指す重荷を負わされる」一方、「<現地語>は、時に美的に高みを目指す重荷を負わされることはあるが、知的や倫理的に高みを目指す重荷を負わされることはない。」(P.132)

本書の議論は、言語（特に書き言葉）のこの三つの形態のせめぎ合いを軸に展開していく。

まずはじめに、私は水村さんが前提にしている英語の普遍語化という現象の前

段階にさかのぼって考えてみたい。

つまり、なぜ英語は普遍語になることができたのか、という問題である。世界に6千以上あるといわれる言語の中で、今なぜ英語だけが一人勝ちをしたのか？

私のブログ「日本語への旅」でも、この問題を取り上げたことがある(060625『[国際共通語の資格](#)』)。

そこで考えたのは、次の点である。

英語が実質的に国際共通語になったのは、イギリス次いでアメリカという英語を母語とする国が世界の覇権を握ったからだ、という通俗的な答えがある。

それに、現代の知的活動の基盤であるIT技術と世界を覆うインターネットが基本的に英語とローマ字の上に構築されている、という事実も加わる。

しかし、そうした歴史的、政治的、軍事的、経済的、技術的要因だけが英語を国際共通語に押し上げた力だろうか、そのような要因とは別に言語そのものの性質の中にも、多くの人々を英語に引き寄せる理由があったのではないか？

かりに日本が米英を上回る帝国主義強国だったとして、果たして日本語が今の英語のように世界を覆う普遍語になることができただろうか？

というのが、ブログの中で提起した問題だ。

たとえば、地球人の言葉を学びたい、という殊勝な心がけを持った宇宙人がやってきたとする。

そして、かれの前に日本語と英語が提示されたとする。もちろんかれはまだ地球における両語の使用人口など予備知識は何も知らされていない。

さて、かの宇宙人はこれから学習する言葉としてどちらを選択するだろうか？

私はきわめて高い確率で英語を選ぶのではないかと思う。語彙、文法、敬語、発音のこともあるが、おそらく文字、表記システムがかれ

の選択の決め手になる。
宇宙人だって、効率的に勉強したいのだ。

地球上で行われている多くの言語はそれぞれ固有の存在価値を持っており、その優劣を論じるのはナンセンスである。
しかし、言語そのものの性質のうち国際共通語になりうる資格を持つ言語とそうでない言語があるのは否定できない。

帝国主義国家は植民地に自国の言語を植え付けるものである。
そして、植民地が解放された後も多くの場合英語はその地で重要な地位を占め続けている。
しかし、日本語はそうはならなかった。
なぜか？

この違いについても、政治的要因だけに帰すことはできないと思う。
おそらく言語そのものの性質が多少ともかかわっている。

人は言葉によって考え、交流し、行動する。
そう考えれば、そもそも米英が世界の覇権を握ったのもその使用言語とは無関係ではないかもしれない。
実証することはできないが、音声言語、文字言語を含めて英語によるコミュニケーションの効率性、正確性、習得の容易さが米英の国力増進にいくばくか寄与したと考えてもおかしくない。

英語の普遍語化という趨勢は好むと好まざるとにかかわらず、受け入れるほかない。
なぜなら、英語には言語の性質そのものの中に普遍語になる資格があった。
そして日本語にはそれがなかった。
水村さんは、普遍語化に関して「英語という言葉そのものに原因はない」(P.49)という立場だけれども、私はこの点少し違う。

とりあえず以上のことを確認したうえで、次に進みたい。

いま世界を覆う英語の普遍語化という趨勢の中で、水村さんは日本語を亡びさせてはならない、と言っている。
そのために、日本における英語教育や日本語教育（国語教育）のありかたにつ

いて具体的な提言もしている。

しかし、なぜ日本語を亡びさせてはならないのか？

水村さんは、単一の言語が世界を一元的に支配したときの怖さを指摘している。

この世には英語でもって理解できる<真実>、英語で構築された<真実>のほかにも、<真実>というものがあろう。(P.88)

想像してみてください。一つの「ロゴス＝言葉＝論理」が暴政をふるう世界を。なんというまがまがしい世界か。そして、なんという悲しい世界か。(P.93)

しかし、水村さんが日本語を亡びさせるにしのびない本当の理由は彼女が日本語を<愛している>からである。

これだけでは身もふたもないので、彼女自身の言葉を借りよう。

なんという、奇妙で面白いことばでしょうか。実際、なんという、粗野でいながらも洗練された言葉か。(P.93)

日本語は<普遍語>の高みに近づき、美的な重荷を負うだけでなく、時には<普遍語>と同じように、知的、倫理的な重荷を負うのが可能な言葉になっていった。(P.169)

これから先、日本語が<現地語>になり下がってしまうこと—それは、人類にとってどうでもいいことではない。たとえ、世界の人があつてもいいと思つていても、それは、遺憾ながら、かれらが、日本語がかくもおもしろい言葉であること、その日本語がかくも高みに達した言葉であることを知らないからである。(P.322)

そんなおもしろい表記法をもつた日本語が「亡びる」のは、あの栄光あるフランス語が「亡びる」よりも、人類にとってよほど大きな損失である。(P.308)

水村さんは先人の血のにじむような努力によって、現地語でありながらいちどは普遍語と渡りあえるだけの高みに到達した日本語がこのまま立ち枯れて、日常生活の用を足すだけの「土語」に墜ちてしまうのが許せないのである。

そして、水村さんのこの情熱、本書全体を通じて彼女の思考を駆動するエネルギー源となっているのは、日本近代文学が存在した、という「奇跡的な」事実なのである。

しかし、ここで水村さんの思いからいったん離れて、「なぜ日本語を亡びさせてはならないのか？」という問いを原点に戻って考えてみたい。

いま日本語をめぐる状況を冷静に観察すれば、事態は水村さんが懸念する方向に着実に進んでいる。

水村さん自身が次のように指摘している。

日本の学者たちが、今英語でそのまま書くようになりつつある。(中略)日本の学者たちが英語で書きはじめつつあるその動きは今はまだ水面下の動きでしかなく、町に行く人には見えない。だがある時からは誰の目にも明らかになるであろう。(中略)特殊な分野をのぞいては、日本語は<学問の言葉>にはあらざるものに転じつつあるのである。(P.256)

すべての講義を英語で行うことを売りにする大学も増えている。

水村さんが言うように、もともと「学問」というものは普遍語で読み書きするものだった。ヨーロッパの学者はラテン語で著述し、東洋の学者は漢文で著述した。そうでなければ、水村さんのいう地球規模の大きな「知の連鎖」の中に入れないのだ。

だとすれば、英語が普遍語の地位を確立した以上、日本の学者であれ韓国の学者であれフランスの学者であれ、英語でそのまま論文を書くのはごく自然な流れというほかない。わざわざ日本語で論文を書くメリットは何もない。

さらに、水村さんは英語への一極化が学問外の領域へと広がらない理由はどこにもない、と言っている。そして、事実英語で書く流れはその方向に進みつつある。

たとえば、世界文化遺産の指定を受けるコツとして元ユネスコ代表部大使の近藤誠一さんは次のようにアドバイスしている。

相手にわかってもらえる論理で説明するのが大事。日本語の論理で書いたものを英訳しても、国際社会では半分くらいしか伝わらない。国際基準に合った論

理で、初めから英語で推薦書を書くことです（朝日新聞 09 年 3 月 2 日朝刊）。

英語で直接書く、ということはまだ誰にでもできることではないが、英語を受け入れる、という流れは大衆的なレベルでますます加速している。

日本語への英語、外来語、ローマ字の「浸透」である。
これは別に今に始まったことではなく、昔からしばしば指摘されていることだ。

ブログ「日本語への旅」でも、この現象を取り上げたことがあった。

外来語はあくまでも日本語である。外国由来の言葉を積極的に取り込んで日本語の語彙を豊かにすることは日本語の得意わざである。外来語の氾濫を嘆く人は多いが、むしろ日本語のしたたかさ、たくましさを感じる。（050925 [『白いことば』](#)）

そこでは外来語の増加をわりあい肯定的に考えていた。この点では水村さんが本書で紹介している「日本語はこのくらいではびくともしない。大丈夫」という河合隼雄や坂口安吾らの考えに近かったかもしれない。

しかし、それも程度問題である。
近年のようにその流入があまりにも急速かつ大規模に進行すると、私のような「日本語大丈夫」派でさえ心細くなってくる。「浸透」ではなく、「浸蝕」という言葉が浮かんでくる。

いま私たちの身の回りを見渡すと、その兆候があふれている。たとえば、ビジネスの世界。

『松下電器』が『パナソニック』に改称したのは記憶に新しいが、漢字名称をカタカナに、あるいはもっと直接的にローマ字表記の英語名に改称する傾向はずいぶん前から続いている。こうした趨勢に対応するため、数年前には商業登記に日本文字だけでなくローマ字も認められるようになった。いま、マザーズなど新興市場への上場企業の名前は9割がたカタカナまたはローマ字表記である。取締役会の公用語は英語、という会社ももう珍しくない。

エンタテインメントの世界も同じことである。たとえば映画。

いま洋画のタイトルは、『パッサンジャーズ』、『レッドクリフ』、『ダウト』などのごとく、原題の発音をそのままカタカナに引きうつす、という方式が主流になってきている。

十年くらい前までなら、苦吟しながらも中身にふさわしい邦題を考えたはずだ。『第三の男』も『真昼の決闘』も今輸入されたなら『ザ・サードマン』、『ハイヌーン』のタイトルで公開されるだろう。

ポップス音楽の世界になると、英語をカタカナに置き換えることさえしない。たとえばタワーレコードのシングルチャートベストテンを見ると、その9割は歌手名も曲名もカタカナの外来語もしくはローマ字表記の英語である。もちろんみな日本の楽曲を日本人が歌っているのである。歌詞の中にも「さよならを Don't stop」という調子で、英語がそのまま姿をあらわす。

洋画における原題の発音をそのままカタカナに引きうつす、という手法は翻訳文学の世界でも広がっている。たとえばサリンジャーの『The Catcher in the Rye』。1964年に出た野崎孝訳の邦題は『ライ麦畑で捕まえて』だった。それが、2003年の村上春樹の新訳では『キャッチャー・イン・ザ・ライ』になっている（この本には解説やあとがきがないので、村上さんがこのタイトルに決めた理由は知らない）。

また、さきごろ新潮文庫から出たジョイスの『ダブリナーズ』もそうである。訳者の柳瀬尚紀さんは、末尾の解説の中で次のように述べている。

従来の邦題は『ダブリン市民』…（中略）などとされてきたが、訳者はあえて『ダブリナーズ』と改題してこの新訳を世に問うことにした。横文字をカタカナにして事足りりとする昨今の風潮に流されたのではない。タイトルの Dubliners という音をそのまま残したいというこだわりからようやく行き着いた訳語だ。

柳瀬さんはまたこうも言っている。

訳者が初めてこの短編集に接した四十数年前と違って、今日の日本語空間は『ダブリナーズ』を違和感なく受け入れるのではないか。

柳瀬さんの言うとおりの、日本語への英語の浸透は『ダブリナーズ』を違和感なく受け入れるところまで進んできたのだ。

ここで注意したいのは、英語をまったく知らない人間にとって『キャッチャー・イン・ザ・ライ』や『ダブリナーズ』というタイトルは、『カリテル』や『ムテサー』と同じく何の意味も伝えない音の転写にすぎない、つまり日本語訳ではない、ということである（『ジェーン・エア』や『オリバー・ツイスト』は固有名詞だから別である）。

逆にいえば、村上さんや柳瀬さんにとっての想定読者はこの程度の原題は解するだろうことが前提になっている。

水村さんは普遍語と現地語の非対称性を指摘している。

村上春樹の小説は海外でも評価が高けれど、英訳のタイトルは『キャッチャー・イン・ザ・ライ』とは違って、意味のある英語になっている。英訳書のタイトルが『Hitsujio Meguru Boken』ではおそらく売れるまい。普遍語と現地語の残酷なまでの非対称性がこんな形でもあらわれる。

英語、外来語を大量に受け入れた結果、私たちはもはや不十分ながらも「二重言語者」に生まれ変わったのだ。

苦勞して原題を日本語に翻訳しなくても通用するようになった。明治維新のころ、西欧の文化を受け入れるにあたって、先人たちは漢字の力を借りて大量に翻訳造語をした。外国語を解する日本人がいなかったのだから、ほかに方法がなかった。それが結果的に日本語の語彙を豊かにした。今日の日本語という国語成立の素地にもなった。

しかし日本人の多くが二重言語者になった今日では、洋画や外国文学のタイトルのように、わざわざ別の日本語に翻訳しなければならない必然性はなくなった。

おそらくこの傾向はタイトルに限ったことではないだろう。外国語のテキストをもっともふさわしい日本語に翻訳しよう、しなければならないという情熱や使命感、動機づけそのものが失われつつある。

水村さんも指摘しているように、国語は普遍語を現地語に翻訳する過程で成立するものである。そして水村さんのエネルギー源である日本近代文学はその国語と不可分の関係にある。

外国語を適切な日本語に移す、という努力の価値が顧みられなくなったとき、それはこれからの日本語にどのような影響を与えるだろう？

ともあれ、英語で直接書くという流れのみならず、翻訳という迂回路をパスして英語を直接受け入れるという流れも大衆的レベルで進んでいる。つまり、米英の植民地だった国々の言語状況にしだいに似てきているのである。

日本人が英語で直接書き英語を直接受け入れる、ということは「美的、知的、倫理的な」ことがらが日本語を素通りしてしまう、ということの意味する。そして、やがては日本語ではなく英語で思考する、ということにつながっていく。そうなれば日本語が空洞化することは避けがたい。

話を少しもとにもどしたい。

大切なことは、英語、外来語、ローマ字の急速大規模な流入は誰に強制されたものでもなく、日本語話者が進んで受け入れてきた結果だ、ということである。

日本人の外来語好きは今に始まったことではない。げんに私も大いに愛用している。『外来語を受け入れる心理』（「ことばシリーズ4」文化庁）というエッセイの中で外山滋比古さんは、手あかのついていない「白いことば」を喜ぶのは日本人の古代からの心性だと言っている。

私もこの見解を下敷きにして、さきのブログ記事を書いた。しかし、英語、外来語、ローマ字を求め受け入れる動機はそれだけではないかもしれない。

日本語話者は無意識のうちに言語的な孤立感にさいなまれているのではないか？

たとえばヨーロッパの諸語は基本的に文字を共有している（多少の変形はあるが）。語彙や文法も根本的な差はない。デンマーク語、オランダ語、英語などは私たちから見れば方言程度の違いしか感じられない。

南米やオセアニアの人々も地理的にはヨーロッパと隔たっているが、言語的には「地続き」の感覚があるだろう。

世界の大多数の人々は、どのような言葉を使っていようとこうした言語的な地

続き感覚を持っている。文字や語彙や音声を多少なりとも共有しているという安心感を伴った感覚である。

太平洋の真ん中に浮かぶナウルやキリバスの人々も、ローマ字を使用しているという点で世界の多数派に属している。

これに対して日本語はどうか？

私が子供のころは、日本語はウラルアルタイ語族の一員だといわれていた。しかし今では、系統不明の言語、というのが定説である。つまり、世界のどこにも仲間がいないのだ。

漢字仮名まじりの表記システムにいたってはまったく孤絶している。

デンマークとスウェーデンの間ではおたがいの母語を話していても通じるけれど、私にはすぐお隣の韓国語もハングルもまったくわからない。

孤独な人はつながりを渴望する。

日本語話者があくことなく英語、外来語、ローマ字を求めるのは他の言語と少しでもつながりたい、という痛切な心情のあらわれなのだ。

四方を絶海に囲まれた孤立感は、いやでも海の向こうへの憧れを育てる。

そして、日本人の場合、その憧れの対象は言葉と書物に向かった。

遣唐使の昔から福沢諭吉に至るまで、海外に渡った日本人が持ち帰ったものは何よりもまず書物だった。中世、近世の海外交易でも書物はつねに主要な輸入品であり続けた。

思えば日本人ほど〈外の言葉〉に餓えた人々はいなかったかもしれない。

会社名のカタカナ化について、水村さんは「もしもこの日本語が西洋語であつたら…という、西洋語への変身願望の表れでしかない」(P.293)と一蹴しているけれども、その願望は列島の地理と歴史に深く根ざしている。

海の向こうの言葉と少しでも文字や語彙や音声を共有したい、そうでなくてはさびしくてたまらない、というのが言語的な辺境にある日本語話者の切ない願望なのである。

海の向こうへの太古からの憧れ、それがあったがゆえに日本列島に漢字、漢文

が伝来したとき私たちは一斉に飛びつき、またたくまに自分たちのものにしてしまった。

その漢字、漢文に代って、今はせっせとローマ字、英語を取り入れているにすぎない。歴史は繰り返すのである。

水村さんのいう「日本語に対する日本人の自信のなさ」も、おそらくこの言語的孤立感と根はひとつである。

初代文部大臣森有礼の英語公用語化論、ローマ字化論も今では荒唐無稽に聞こえるけれども、「言語的に世界とつながらなければ日本はやっていけない」という思い込みがあったせいかもしれない。

本書に登場する北一輝や志賀直哉も同じ思いだったにちがいない。

余談になるが、私のブログの中で「もしも中国が漢字を廃止したら」という仮定について考えたことがある(060826 [『驚天動地の事態』](#))。

「幕末明治にももしも日本がアメリカの植民地になっていたら」という仮定と同じくまったくのSF的空想ではない。

もしも中国が漢字を廃止したら、世界で漢字を用いるのは日本と台湾だけになる。その時、日本語話者の言語的寂寥感は頂点に達するだろう。

そして、日本語表記のローマ字化がその時はじめて現実の課題になる。

こうした言語的な孤立感、そこから派生する〈自分たちの言葉〉に対する不全感を私たちは二千年来抱え続けてきた。抱え続けながらも、いちどは普遍語と肩を並べるまでの高みに到達することができた。

その意味では、日本語はまれにみる言語かもしれない。

もうひとつ、日本語話者の孤独をいやますような事態がいま進行しつつある。

日本の人口減少である。

周知のとおり、日本の人口は2006年あたりをピークとして、今後長期にわたって減少を続ける。

ただでさえ心細い日本語話者がますます少なくなっていくのである。

人口減少はさまざまな産業分野に影響を及ぼすけれども、もっとも大きなダメ

ーシを受けるのは出版産業だろう。

他の産業なら、国内市場が縮小すれば海外市場に進出するという手もある。しかし、出版という言語産業の場合、そうはいかない。日本の人口減少はそのまま出版産業の縮小に直結する。

水村さんは、明治に入っていちはやく日本近代文学が成立した歴史的条件を三つあげている。一つは江戸期から出版資本主義が発達していたこと、二つ目は中国との地理的距離のおかげで独自の書き言葉が成熟していたこと、そして三つ目に日本が西洋列強の植民地化を免れたことである。

しかし、私は水村さんが言及していないもう一つの条件があると思っている。つまり、日本近代文学が成立し発達した時代は、そのまま日本の読書人口が急増した時代だったのである。

明治の初め、日本の人口は3千万人余りだった。それが150年の間に4倍に増えた。加えて、その間に学校教育を通じて識字率がますます向上し読書の習慣も広く普及した。

出版産業の顧客である読書人口の伸びは単なる人口の伸びをはるかに上回っていたはずである。当然、本に対する需要は急膨張し、出版市場は活況を呈する。文学が出版産業に依存するものである以上、日本近代文学の存在はこの事実を抜きにしては考えられない。日本近代文学は誕生の当初から強力な応援団に恵まれたのである。

明治以降150年にわたって膨らんできたその市場がこれからは確実にしぼんでいく。当然出版事業者の意欲も減退する。「出版不況」という言葉も語られてすでに久しい。

日本語を普遍語と渡りあえるまでの高みに押し上げる原動力となった日本近代文学の土台が崩れつつあるのである。

英語という普遍語がまるで頭上を覆うような勢いで押し寄せてくる。その大波を前にして、世界の言語的孤児である日本語はなすすべなく立ち尽くしている。しかも、日経つごとに味方の数が減っていく。

私たちは一体どうすればいいのだろうか？

何ができるのだろうか？

ここで、もういちど「国語」について考えてみたい。

既述のように、国語とは近代国民国家の勃興を背景として、普遍語を現地語に翻訳する過程で成立したものだ。

そして、西洋であれ非西洋であれ、その国語が「国民文学」を生み、「国民」を実体化し、ナショナリズムを鼓舞した。

しかし近年その事情が変わってきたように思われる。

国家対国家の20世紀型戦争は過去のものになり、アメリカが「テロとの戦争」で相手にしているのは、超国家的なつかみどころのないネットワークである。また、EUのような国家を超えた地域共同体がますます重要な役割を演じつつある。

それは近代国民国家の終焉の兆しであり、その国民国家の言語的対応物である「国語」も遠からずその歴史的役割を終える。

その証拠に、国語成立の契機となった普遍語から現地語への翻訳という営為への情熱が冷めてきている。これはさきに触れたとおりである。

国語の終焉について、もうひとつ傍証をあげておきたい。

国境を超える人々の移動が拡大するにつれて、国際結婚が当たり前になってきた。日本はまだ少ないほうだが、それでも今では20組にひと組は国際結婚である。つまり、今日では一つの家族の中で複数の言語が用いられる状況が珍しいことではないのである。

人は国民である前に家族の一員である。一つの国家に一つの国語、という時代は過去のものになりつつある。

国語が存在意義を失い、普遍語と現地語（と言っても国語の時代を経てより洗練された現地語だが）だけが残る時代がやってくる。

だとすれば、これからの私たちの選択肢は二つしかない。

ひとつは、私たちがすべからく英語の使い手になり、普遍語の恩恵を余すところなく享受すること。

もうひとつは、あくまでも日本語をよりどころとし、これを守り通すことによって、普遍語に立ち向かうこと。

まず第一の道について。

事態がここに至った以上、感傷や郷愁にとらわれることなく国民的規模で英語の使い手を目指す、というのもひとつの見識である。

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』がわかる程度の中途半端な二重言語者ではなく、シンガポールの人々のように英語を不自由なく使いこなせるほんものの二重言語者を目指す。それによって、普遍語のメリットを最大限享受するのである。

そうなれば、日本語話者の数千年来の言語的孤立感も癒されるだろう。言葉の上で世界と地続きになる。「読まれるべき言葉の連鎖」に確実につながることができる。

そして大切なことは、このような選択が程度の差こそあれ、非英語国の多数派になりつつある、ということである。

この趨勢を推し進めていけば、いずれ本当の国際共通語が誕生する。バベルの塔が崩壊して以来人類の悲願だった「世界のすべての人々が同じ言葉で通じあう」ことが可能になる。

たしかに、水村さんの言うように「一つの『ロゴス＝言葉＝論理』が暴政をふるう世界」はまがまがしいものかもしれない。しかし同時に、「世界の人々が同じ言葉で通じあう」メリットもまたはかり知れない。

アメリカで出会った日本人とモンゴル人の作家は英語で意思疎通するしかない。今のところ、その会話はまだあいさつの域を出ない。しかし、この先英語が本当の国際共通語になれば、ふたりは文学について、美について、生と死についてはるかに深く語りあうことができる。

学者や官僚だけでなく、野心的な小説家は英語で作品を書くことができるようになる。狭い日本だけでなく、さまざまな文化的背景をもった世界中の人々に向けて作品を問うことができる。

たしかに、「小説と〈母語〉とは、…強い、神秘的ともいえる、特別な関係をもって」(P.82) いる。しかし、同時に「英語を〈母語〉とはしなくとも、英語を読める読者」こそ「文学にとって、もっとも重要な読者」(P.83)なのである。

小説家ならそうした読者を相手にしない、という法があるだろうか？

水村さんは言う。

書くという行為は、私たちの目の前にある世界、私たちを取り巻く世界、今、ここにある世界の外へ外へと、私たちの言葉を届かせることです。(P.84)

そして、英語という普遍語はそのためにある。

英語で書かれた文学は、すでにもっとも数多く、もっとも頻繁に、この世の壁を乗り越えていっているのです。(P.84)

近代国民国家と国語がその歴史的役割を終えるとき、「国民文学」も同じ運命をたどる。

代わって、英語で書かれる「普遍文学」というカテゴリーが生まれるのだ。

英語という言葉は誰のものでもない言葉、つまり、すべての人が、自分のものだと思える言葉になっていったのです。(P.85)

英語がもはやアメリカやイギリスの言葉ではなく、現代に生きる地球人の共通語だという認識に立てばその習得の努力にもはずみがつく。

国民的規模でほんものの二重言語者を目指す、というのはたしかに大変な事業にはちがいない。しかし、母語や国語としての英語を習得するわけではないのだから、不可能な目標ではない。十分成り立つ選択肢である。

ただし、当然少なからぬ教育資源を英語習得のために割かなければならない。

したがって、そのしわ寄せは国語教育に来る。

日本語は現地語に甘んじる、という覚悟が求められる。

日本語には多くを求めず日常の用を足すことができればそれでいい、「美的、知

的、倫理的な高み」を目指すことは普遍語にゆだねる。私たちはみな二重言語者になるのだからそれができる。

そんな割り切った役割分担を受け入れなければならない。

普遍語の恩恵を受けることの、当然の代償である。

もしそんな覚悟はできない、というのなら国民的規模で二重言語者を目指す、という選択はあきらめなければならない。

残されたオプションは、これまで同様日本語をよりどころとして英語の世紀に向きあい国際共通語の世界と渡りあうことである。

そして、これはこれで別の覚悟が求められる。

何度も言うように日本語は世界から孤立した言語である。この言葉でコミュニケーションする、読み書きをする、考え行動する、ということは将来にわたって世界の「知の連鎖」とのつながりをあきらめ、日本語の狭い檻の中で終生暮らしていくということである。

果たして、その覚悟はできているだろうか。

右の道も左の道も、ただならぬ覚悟が必要な道である。

いま私たちはそんな岐路に立たされている。

正直言って、どちらの道を取るべきか、私にはわからない。

ふたたび本書に戻って、水村さんは日本語を亡びさせてはならない、と言っている。そして、最終章「英語教育と日本語教育」の中でそのための具体的な提言を行っている。

その要点は、高度な英語力で世界と渡りあえる使い手を一定数養成すると同時に、一般の初等中等教育における英語教育は基礎部分にとどめ、残りの資源とエネルギーを日本語教育（国語教育）に注ぐ、ということである。

そして、その日本語教育の力点は彼女のエネルギー源でもある日本近代文学を徹底的にたたき込む、というところにある。

この最終章では英語教育と日本語教育が論じられているが、もちろんその主眼

は日本語教育にある。

そして、「学校教育を通じて日本人は何よりもまず日本語ができるようになるべきである」(P.284)、「〈国語〉としての日本語を護る、という、大いなる理念をもたねばならない」(P.285)という本章での水村さんの主張からすれば、上に示した二つの選択肢のうち、後者すなわち日本語を守りきることによって普遍語に対峙する、という考え方に近いことは明らかだ。

水村さんは、日本の学校教育に最後の、一縷の望みを託している。

しかし、学校教育というのはその宿命として標準的、平均的なレベルに目標を設定するものだ。水村さんの過激論が採用される見通しは低い。

水村さんが指摘し、非難しているように日本の国語教育は「だれもが読めるように書けるように」というレベルに照準を合わせている。

そして、私はその目標設定がそれほど間違っているとは思わない。

日本人は万葉の昔から文学好きの民である。

どの新聞にも必ず詩歌の投稿欄が設けられ、列島の津々浦々で今日も句会や歌会が開かれている。プロではないふつうの人々が当然のように文芸に親しんでいる。「文学で町おこし」というのが冗談でなく成り立つ国でもある。こんな国は他にあまりないのではないか。

そんな言語的・文化的環境に「だれもが読めるように書けるように」という教育目標はよくなじんでいる。そのために、教材は必ずしも第一級の日本語ばかりではないかもしれない。しかし、教育は英語教育であれ国語教育であれ、しょせん年少の一時期にきっかけを与えるものでしかない。標準的、平均的なレベルまで引き上げたあとは、各人の意志と能力にゆだねるしかない。

日本が古い時代からすぐれた文学を持ちえたのも、近代に入っていちやく国語を確立し日本近代文学を生み出したのも学校教育のおかげではない。

学校教育もその中に含み、歴史も制度も科学技術も風土もすべてを含むさらに大きな「言語文化」(「言語意識」と言ってもいい)の総体が人々の意志を刺激し、能力を開花させる。

水村さんが感動を受けたという『にあんちゃん』も戦後の学校教育と作者を包

み込む「言語文化」の中から生まれた。

そしてその「言語文化」は、私たちの手の届かないところで無数の要素が絡まり合ってその帰趨が決まるものだ。

日本語が「亡びる」かどうかも、結局はこの「言語文化」の手のうちにある。

最終章に至って、水村さんの日本語への〈愛〉がほとばしり出る。

〈愛〉ゆえの悲憤慷慨が炸裂する。

しかし、日本語への愛を語ることはつねにあるジレンマを伴う。日本語の狭い檻へみずからを追い込むリスクを背負う。

なぜ「檻」かといえば、日本語を解さない人にとってそれがバリアになるからである。

たとえば、水村さんは日本語表記のおもしろさを語り、それが西洋の伝統的な話し言葉中心主義の誤りを衝く証左だと述べている。

たしかに、「フランス」と「ふらんす」と「仏蘭西」は音は同じでも意味は違う。

「秘密」と「ひみつ」と「ヒミツ」と「ヒ・ミ・ツ」も表記によって異なる意味が生まれる例である。

こんな芸当ができるのは世界広しといえども日本語だけである。ここに日本語表記の自由度と表現力の高さがあらわれている。しかし、同時にそれが通用するのは水村さんも言うとおり日本語話者の間だけ、つまり身内の間の愉しみでしかない。(060512 [『三種混合表記の術』](#) 参照)

漢字もまた日本語における表記の自由度と表現力を高めている。同時に、これまた日本語話者にだけ解読可能なパズルである。

私たちは「時雨」を「しぐれ」と読ませ、「紫陽花」を「あじさい」と読ませて愉しんで（楽しんで？）いる。こうしたパズルを愉しみながらも、日本語における漢字はつくづく「読めない文字」だ、という感を深くする。

漢字についてはもう一つ問題がある。

水村さんは、「漢字はかつてのように『不便なもの』でも、ポピュリズムと相反

するものでもなくなった」(P.297)と述べている。

そうなったのは、ワープロソフトの出現というIT技術のおかげである。しかし私たちがワープロへの依存を深めた結果、漢字は「読めない文字」であるばかりか、もはや「書けない文字」にもなっている。

いま「書く」ということは、パソコンに向かってキーボードをたたく、ということである。IWPの作家たちもホテルの部屋にこもって黙々とキーボードをたたいていた。

しかしその動作の意味は、ローマ字圏の書き手にとってはタイプライター時代と基本的に同じである。

その点、日本語の書き手にとって、筆記具と書く動作が変わったことははるかに深刻な意味を持つ。

私たちはキーボードからローマ字入力で漢字仮名まじり文をたたき出している。つまり、今やローマ字を介してしか漢字にアクセスできなくなっているのである。(061224 [『漢字文化の混迷』](#) 参照)

漢字表記の見えざる空洞化…。

水村さんは、現存する唯一の表意文字が絶滅する危機を人類は脱した、と述べる。しかし、10年、20年はいざ知らず百年単位で考えた時、漢字ひいては日本語表記の運命について私は水村さんほど楽観的ではない。

漢字はまことに結構な文字である、と水村さんは言う。私も同感である。漢字の魅力は汲めども尽きないものがある。その漢字にひらがな、カタカナをまじえた日本語表記も変幻自在で素晴らしいことこの上ない。

しかし、それが狭い檻の中での、他者を寄せつけない「秘儀」であると言われれば返す言葉がない。

母語への〈愛〉を語ることはむずかしい。

日本語のような孤立した言語への〈愛〉を語ることはなおさらむずかしい。

下手をすると、日本語の閉鎖性をさらに深めてしまう。そして、私たちを甘い自己満足の世界に誘い込む。

人は母語を選べない。これは運命の出会いである。

私は物心ついたところから、気がつけば日本語を使っていた。漢字仮名まじりの表記で今までずっと書いてきたし、これ以外の表記で書くことはできない。水村さんのように日本近代文学に深い造詣があるわけではないが、それでも日本語への愛着は人並み以上にある。

そんな私たちにとって、〈自分たちの言葉〉である日本語を亡びさせてはならない、というのは自明の命題に聞こえる。

しかし、その命題の最後のよりどころが、日本語への〈愛〉という素朴な、うつろいやすい主観的情緒だけだとしたら、それは日本語の「亡び」を押しとどめるための有効で現実的な力にはならない。

本書は日本語と日本近代文学に捧げる小説家・水村美苗の頌歌である。

「日本語を亡びさせてはならない」というメッセージもその歌の中から聞こえてくる。

しかし、「日本語を亡びさせてはならない」という〈呪縛〉から解き放たれた時、かえって日本語の秘められた可能性が見えてくるのではないか。

水村さんは次のように言っている。

どの民族の言葉も、その言葉自体は、歴史の流れの中で偶発的にできたものであり、その言葉が世に存在する必然性もなければ、ある民族にとって、その言葉が自分たちのことばとなる必然性もない。(P.312)

したがって歴史的条件や環境が変われば、その言葉と私たちの関係も変わらざるを得ない。英語という普遍語が大波のように押し寄せ、インターネットが世界中の言葉を瞬時に結びつける今、日本語も固定的に考える必要はない。

水村さんは、本書を次のような言葉で結んでいる。

もし、日本語が「亡びる」運命にあるとすれば、私たちにできることは、その過程を正視することしかない。(P.323)

しかし、たとえなりゆきの赴くところ日本語が「亡び」たとしても、それで終

わりではない。

私たちには「亡びたあとの日本語」が残されている。

「亡びたあとの日本語」は日本語のぬけがらだろうか。
そうではあるまい。

「亡びたあとの日本語」は現地語である。「土語」と言ってもいい。
土語とは文字通り、私たちの生きる大地から湧き上がる言葉である。

その言葉は、私たちの山河を歌うことができる。
大地に生きる人々の哀歓を歌うこともできる。
ひょっとすると、〈世界〉を歌うことさえできるかもしれない。

水村さんの言うように現地語は知的あるいは倫理的な重荷を負うことはできないかもしれないが、少なくとも美的な重荷を負うことは可能なのである。

日本の風土から生まれた言葉まで、私たちは失ったわけではない。
土語には土語の可能性が秘められている。
英語にしろラテン語にしろはじめから普遍語であったわけではない。すべての言語は土語から生まれ育ったのだ。

古い例で恐縮だが、「兎追ひしかの山…」で始まる「故郷」。
高野辰之は明治時代の国文学者でありながら、漢語を一切使わず和語100%でこの歌詞を作った。(051106 [『和語と漢語』](#) 参照)
それから100年後、ユーマンは「ひこうき雲」をやはり和語100%で作詞している。

土語（和語）の生命力は、地下水脈のように私たちの言語生活の深いところで息づき生きながらえてきた。

思えば私たちは漢字伝来以来今日まで、久しく土語の可能性を封印してきた。
言語的な孤立感と〈自分たちの言葉〉に対する不全感から、漢字、漢語というありがたい〈外の言葉〉に依存し続けてきた。(051204 [『漢語の功罪』](#) 参照)
そのために、「土語」の可能性を開発する努力を怠ってきた。

この際、日本語が「亡んだ」のを奇貨として、あらためて土語を見つめ直し、磨きをかけ、その可能性を開発することも私たち日本語話者の務めではないだろうか。

最後に、「亡んだ」日本語にはどう向き合えばいいか？

さいわい私たちは、愛するものの亡びを受け入れる作法を知っている。それは、愛するものを永遠に忘れることのないよう顕彰し、語り継ぐことである。

日本語がいちどは普遍語と渡りあえるほどの高みに到達したこと。かつて日本近代文学という「奇跡」が存在したこと。その日本近代文学が、「世界の主要な文学」のひとつと呼ばれたこと。

この歴史的事実を刻んだ「日本語記念館」を設置するのである。

どこに？

私たち日本語話者一人ひとりの心の中に、である。

日々の、現実の言語生活がどのようなものであれ、「日本語記念館」に立ち戻りさえすれば、私たちは「日本語が輝いた時代」の記憶を鮮やかによびさますことができる。そんな仕掛けを作っておく。

そうすれば、いつか日本語が<再生>する日のために、ささやかな芽を残すこともできる。

言語に関して学校教育にできることは限定的だけれども、「日本語記念館」を建てることなら学校教育を通じて実現することができる。

そして、私たちは子孫のために代々語り継いでいく。

地球上の言語の海に、かつて日本語という小さく光る宝石のような言葉があった、ということ。

[もどる](#)

